

オマーンのメタモルフィックソールの微小変形構造：特に線構造について

Lineations in metacherts of the metamorphic sole beneath the Oman ophiolite

増田 俊明 [1], 青島 逸子 [2], 釘宮 康郎 [3], 伊計 秀明 [2]

Toshiaki Masuda [1], Itsuko Aoshima [2], Yasuo Kugimiya [1], Hideaki Ikei [3]

[1] 静大・理・生地環, [2] 静大院・理工・生地環, [3] 静大・理・環境

[1] Inst. of Geosciences, Shizuoka Univ., [2] Geoscience, Shizuoka Univ., [3] Inst. Geosciences, Shizuoka Univ.

ワジタイン地域のメタモルフィックソールの23個のメタチャートについて、特に線構造に着目して薄片観察を行った。観察は主として面構造に平行な面で行った。線構造として認識できるものは次の5つである：(1) 柱状鉱物の伸張方向による線構造、(2) 石英の長軸で認識できる線構造、(3) プレッシャーフリンジによる線構造、(4) 小断層面と面構造の交叉線構造、(5) 石英中のバブルプレーンと面構造の交叉線構造。

海洋底衝上断層の運動方向の証拠として提示されている超塩基性岩中に認められるNE-SW方向の線構造と平行なのは(1)と(3)である。

ワジタイン地域のメタモルフィックソールの23個のメタチャートについて、特に線構造に着目して薄片観察を行った。観察は主として面構造に平行な面で行った。線構造として認識できるものは次の5つである：(1) 柱状鉱物の伸張方向による線構造、(2) 石英の長軸で認識できる線構造、(3) プレッシャーフリンジによる線構造、(4) 小断層面と面構造の交叉線構造、(5) 石英中のバブルプレーンと面構造の交叉線構造。

(1) 柱状鉱物による線構造は主として紅簾石・角閃石の選択配向による線構造で、ほぼNE-SW方向の平均値を持っており、例外的にバラツキが激しく線構造を認定できないものがある。(2) 石英の伸張方向は、石英の伸張方向の選択配向により定義出来る線構造で、サンプルごとに方向が異なっており、安定していない。(3) 黄鉄鉱の縁に緑泥石が成長してプレッシャーフリンジを構成しているサンプルが個ある。伸びの方向はほぼ鉱物線構造と平行である。(4) の交叉線構造は、面構造に高角な破断面が、面構造上に現れることによって認識できる見かけの線構造である。その方向はまちまちで、安定していない。(5) の交叉線構造の方向も安定していない。

海洋底衝上断層の運動方向の証拠として提示されている超塩基性岩中に認められるNE-SW方向の線構造と平行なのは(1)と(3)である。(2)・(4)・(5)は方向が安定していない。これらのことから、海洋底衝上断層運動時に形成されたのは(1)と(3)で、他の線構造は後のステージで形成されたものと考えられる。